
夜這い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜這い

【Nコード】

N8767H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

真魚は何度告白しても全く気付かない仙一にいい加減切れかけていた。その彼女が採った最後の手段とは。恋は時には思いきり押すとはいってもこれはかなり乱暴な内容のお話です。

第一章

夜這い

何度告白しても。それでも駄目だった。

「やれやれよね」

一人の女の子が学校帰りの喫茶店の中でばやいていた。木造の壁に白い床、それと同じ色の白いテーブルに椅子が実に洒落ている。何処か大人の雰囲気醸し出している店だった。

「仙一君全然気付いてくれないのよね」

「あら、今日も駄目だったの」

「今回も」

彼女と一緒にいる制服の女の子達が述べてきた。見れば彼女達は店の円卓に座ってそのうえで囲むようにして座ってそこで話をしていた。

「真魚も努力してるのに」

「相手は手強いつてやつ？」

「手強くないと思うのよ」

その女の子河合真魚は困った目をして彼女達に答えた。髪は黒く綺麗なその髪を長く伸ばしストレートにしている。顔は白くやや細長い。目は吊り目でも垂れ目でもなく普通の感じだが大きく目の光がかなり穏やかで優しい。背は結構高くまだ幼さの残る顔立ちとはかなり対称的になっている。そしてグレーのブレザーと青にくすんだ赤を基調としたタートンチェックのミニスカートの制服からのぞいている白い足がかなり眩しい。

「実際ね」

「けれど全敗してるじゃない」

「今までのところ」

「それはあれよ」

真魚は苦い顔になってまた皆に話してきた。

「仙一君が気付いてくれないのよ」

「そうなの」

「それで駄目なのね」

「そういうこと。今までそれで全部玉砕」

言ってさらに苦い顔を皆に見せるのだった。

「告白もラブレターもメールも電話も全部駄目だったわ」

「しかもそれ全部何回もやってるわよね」

「今日は体当たりの告白だったわよね」

「そうよ。それだったのよ」

また随分と身体を張っているのがわかる。それがいいか悪いかはまた別の次元に置いてとにかく真魚が真剣なのがよくわかる。

「いきなりぶつかってそれで好きですって大声で言っただけ」

「で、いつも通りと」

「哀れ玉砕」

周りの女の子達は肩を竦めさせてあえて茶化して述べてきたのだった。

「これで何回目かしら、玉砕」

「もう横浜ベイスターズの負けた数より多いんじゃないの？」

「残念だけれどそうよ」

真魚自身もそれは否定できなかった。

「本当に。百回は失敗してるわ」

「やれやれ。仙一君が鈍いのもあれだけれど」

「真魚も随分と続くわね、本当に」

「好きとなったらもう一直線よ」

真魚はここで右手を力瘤にしてそのうえで断言するのだった。

「それが私の絶対のポリシーなんだから」

「つまり突撃一直線ね」

「それしかないってわけね」

「そうよ。しかも何度敗れてもその都度立ち上がって」

殆ど何かの漫画の主人公の乗りである。右手を力瘤にして力説し

ているのでそれが余計にそう見える。とにかく彼女が一途なのがわかる。

「最後には勝つのよ」

「勝つって。違うでしょ」

「彼氏ゲットでしょ、この場合は」

「ドラゴンボールじゃないんだから」

皆呆れてそうしたことにかけてはあまりにも有名なその漫画のことも話に出してきた。

「勝つって何に勝つのよ」

「苦難に勝つのよ」

やはり真魚は何か恋愛とは特別なものを見ていた。

「絶対にね」

「それはわかったわ」

「とりあえずね」

友人達もとりあえずその言葉は受けた。しかしそれでもだった。

「けれどよ。それでもよ」

「今日も失敗したじゃない」

「それでどうするの？」

あらためてそのことを真魚に対して話すのであった。皆で。

「今度は」

「また告白？それともメール？」

「どれで攻めるの？」

「もうね。あちらの御両親はわかってくれてるし」

普通百回も告白すれば相手の両親もそのことがわかる。従って真魚も仙一の両親によく知られているようになっていたのである。そういうことだった。

第二章

しかもかなり好意的であつた。真魚は確かに暴走しているがそれでも悪い娘ではない。そして自分の息子のことを何処までも一途に想つてくれている。だからいいとしているのだ。

「だからよ。もう思い切つて」

「はい、思い切つて」

「何をしでかすのよ、今度は」

「夜這いよ」

また右手を力瘤にしての言葉だつた。

「もうね。それで行くわ」

「夜這いつてあんた」

「また何言つてるのよ」

彼女の今の言葉を聞いてまた呆れる面々であつた。

「あのね、夜這いつて何時の時代の話よ」

「そもそも何よ、女の子が夜這い!？」

「女だつて夜這いはするわよ」

だが真魚はこう言つて引かない。

「昔からね。男の子だけじゃないわ」

「だからつて言つてあんたがやっていいつて訳はないでしょ」

「本当に何考えてるのよ」

「私は本気よ」

真魚は最早周りを見ていなかった。もつともそれは最初からだが。

「もう決めたから」

「少しは人の話聞いたら？」

「つていうかあんたの耳どつという構造してるのよ」

友人達はここでまた呆れた声で真魚に対して言つのだつた。表情もそつしたものになっている。

「暴走ばかりして」

「思い込んだら一途なのもいいけれど」

「真実一路よ」

しかし真魚は変わらない。それも全くだった。

「あくまでね。やってやるわよ」

「やれやれ。わかってたけれど」

「やっぱりそうなるのね」

皆の声は呆れていたがそれでもそこには暖かい笑みがあつた。

「じゃあいいわ。夜這いでも何でもしなさい」

「けれど。いいわね」

「わかつてるわ。ゲットしなさいでしょ」

「そうよ」

「それしかないわ」

やはり皆の言いたいことはそれだった。それしかなかった。

「じゃあ。ゲットしなさい」

「何があつてもね」

「ええ、今度こそ絶対に」

真魚が燃え上がる。確かにその背中に激しい紅く燃え上がるものを見せていた。

「仙一君。ゲットしてみせるわ」

目も燃え上がっていた。まさに彼女は今燃える女になっていた。そうしてその燃える心のまま。その夜のうちに彼の家に行って来たのであつた。

「あつ、真魚ちゃん」

「はい、お母さん」

家に着くと仙一の母親が出迎えてきた。寝巻き姿で玄関に立っていた。そうしてそのうえで彼女を出迎えてきたのである。

「お邪魔します」

「仙一の部屋だけれどね」

「何処ですか？」

「案内してあげるわ」

何とここまで協力的な彼の母だった。彼女のことがそこまでわかっていてということだがそれでもこれはかなりのものだった。まず有り得ないレベルだ。

「まずはあがつて」

「すいません」

「いいのよ」

母親は真魚に優しい笑みを浮かべて返すのだった。見ればその顔は真魚に非常に似ている。顔立ちだけでなく表情まで実にそっくりだった。

「だってね。私もあれなのよ」

「お母さんも？」

「仙一のあの鈍感さには手を焼いているのよ」

言いながら今度は苦い顔になるのだった。表情もかなり豊かである。

「本当にね」

「そうなんですか。そうですね」

「それは真魚ちゃんが一番よくわかってることよね」

「はい」

母親の言葉に確かに、そして残念そうな顔で頷いて答えるのだった。

「本当に。今までかなりアタックしてますけれど」

「百回目だったわよね。この前で」

「確か。それ位です」

真魚は記憶を辿ったうえで返す。考えてみればそれ位は確かにある。しかしそれでも多いだろうとも思うのだった。実際の数はどれだけあるのか本人も把握しきれないところがあった。

「けれど全然」

「そんな子にはね。徹底的にやるのよ」

「徹底的にですか」

「そうよ」

強い声で真魚に対して言い切ってきた。

第三章

「徹底的にね。いいわね」

「だからここまでしてくれるんですか」

「彼氏をゲットするのに手段は選ばない」

この母親も相当なことを言う。しかも他所様の娘に対して。

「断じてね。いいわね」

「断じてですか」

「先着一名様だけだけれどね」

この縛りはつけておくのだった。それは忘れないのは見事だった。この強引極まる母親はだからこそそれなりのモラルも持っているようである。

「何があってもなのよ」

「だから私にもですか」

「そうよ。来なさい」

また自分から彼女を促す。

「いいわね。そつとね」

「わかりました。それじゃあ」

こうして母親にその仙一の部屋を案内される。案内されるその部屋は二階にあり暗い階段を二人並んで静かに登りそのうえで。ある部屋の扉の前に来たのだった。

「ここですか」

「そう、ここよ」

母親は真魚と向かい合ってそのうえで述べるのだった。

「ここで寝てるから」

「わかりました」

「ぐっすりだね」

こう付け加えることも忘れてはいなかった。

「寝てるから。絶好の機会よ」

「有り難うございます。それじゃあ」

「いい。ただしよ」

ここで母親の言葉が真面目なものになる。その表情もだ。

「気をつけることはただ一つ」

「ただ一つですか」

「避妊は忘れないことよ」

このことを言うことは忘れないのだった。

「いいわね。今はそれは守って」

「避妊って。あの」

「当たり前でしょ」

あまりにもダイレクトな言葉に啞然とする真魚にまた言うのだった。

「夜這いは何だと思ってるのよ」

「何だっていいですよ」

「そうでしょ。夜這いはその為にあるのよ」

はつきりとは言っていないがそれでも確実にわかる言葉であった。

「わかったら行きなさい。いいわね」

「はい。それじゃあ」

「健闘を祈るわ」

敬礼こそしないがそれでもその言葉は出撃、しかも特攻に向かう特攻隊員のそれであった。そうしてそのうえで今真魚は扉の部屋を開いたのだった。母親は何時の間にか何処かに消えていた。暗い家の奥に。まるで煙のようにその姿を消してしまっただのた。

扉の中は真つ暗闇で何も見えない。しかしベッドだけが朧に見える。彼女はそれを確認して静かに息を呑みそうして。そのうえでベッドに近付きあがったのだった。

「ねえ」

ベッドにあがると声をかけた。

「起きてる？っていつも」

言っただすぐ側で微笑むのだった。

「今は起きてたらずいわよね。やっぱり」

ベッドの上の方に仙一の顔が見える。穏やかな二重の目をしてのどかそうな表情をしているのは寝ていても変わらない。それは同じだった。

「それじゃあ」

とにかく彼女は意を決するのだった。

「あの、仙一君」

「んっ？」

「起きて」

意を決してそのうえでの言葉だった。

「起きてくれないかしら」

「起きてって？」

「だから。起きて」

真魚は彼が起きだしたのを見て内心ドキリとしたのは事実だ。腹を括ったとはいえそれでも今起きようとするのを見ると驚きを隠せない。そういうことだった。

「起きて欲しいのだけれど」

「起きてって言われても」

呑気な言葉だった。やはり時間の概念がないような。

「まだ夜じゃないの？」

「夜でも起きて」

真魚はまた彼に告げた。

第四章

「いいから。起きてよ」

「起きてって言われても」

彼の呑気な声はそのまま続く。

「夜なのに」

「いいから」

とにかく強引にそういうことにする真魚だった。どんな事態でも強引なことは変わらないようである。

「起きて。早く」

「うつん、起きないと駄目なの」

「そうよ」

そしてこのことをまた彼に告げた。

「だからね」

「わかったよ。それじゃあ」

目を開ける。するとそこにいたのは。

「えっ……」

「あれ、河合さん？」

「そうよ、私よ」

彼女は既にベッドの中に入っている。彼の横に寝ての言葉だ。

「私よ」

「何でここに？」

「決まってるでしょ。どうしてここにいるかなんて」

流石に今は頬を赤らめさせそのうえで彼に告げてきていた。

「もうそれは」

「まさかこれって」

「そうよ、夜這いでも何とでも言っ」

今度は居直ってきた。もうここまで来たら引くわけにはいかない。だからだ。

「もうね。何とでも」

「どうしてここに？」

しかしここでも。仙一の言葉はぼけたものであった。やはり天然であつた。

「何でなの？」

「だから。告白に来たのよ」

最早一直線だつた。止まることも外れることもない。

「告白にね。だから来たのよ」

「わざわざ僕の家に来て来るなんて」

「もうはつきり言つわよ。いいわね」

その一直線の勢いのまま続けるのだつた。

「好きだから」

「僕のことか？」

「そうよ。何回も言つて気付いてもらえなかつたけれど」

実際に真魚は彼にこの言葉は何度も言っている。しかし彼は全く気付くことがなかつた。だから百回も玉砕しているのだ。そういうことだつた。

「それでもね。また言つわ」

「僕が好きなんだ」

「何度でも言つわよ」

勢いは止まらない。

「好きよ。仙一君のことが大好きよ」

また言つた。

「いいわね。付き合つて」

腹を括つた。この言葉を出す時は流石に。何度も言っているがそれでも腹を括るものだつた。そうしないと決して言えない言葉だから。

「私と。いいわね」

「うん。じゃあ」

そして仙一は戸惑いながらも頷くのだつた。

「わかったよ。それじゃあ」

「本当ね？」

「本当だよ」

おっとりとした声のままだったがそれでも嘘ではなかった。

「僕嘘言うのは嫌いだから」

「わかったわ。よかった」

ここまで聞いてほっと安堵の息を漏らすのだった。

「やっと。受けてもらえたわ」

「だってさ。僕だって気付いたから」

「こっ真魚に述べる仙一だった。」

「こうして部屋にまで来てくれたら」

「そうよね。わかってくれるわよね」

「うん」

「よかった。来たかいがあったわ」

彼の母親に手引きされてここに来たことは言わない。流石にそれは内緒だった。言えばややこしいことになることがわかっていたからだ。

「勇気を出して」

「驚いたよ、声がして起きたらこうだもん」

「もうこれしかないって思ったから」

「このことは言うことができた。」

「だからよ」

「そうだったんだ」

「そうよ。それでよ」

このことを話したうえでまた言う真魚だった。

「いい？」

「いいって？」

「今ベッドの中で二人きりじゃない」

このこともはっきりと言う。もうここまで来たらこう言っていくしかなかったからだ。止まることはなかったしブレーキをかけるこ

ともできなくなっていた。

第五章

「だから。いい？」

「ええと。つまりそれって」

「そうよ。あれよ」

またここで顔を赤らめさせてしまった。

「いいわよね。私はいいから」

「じゃあ。僕と」

「………来て」

自分から誘う言葉だった。

「このままね」

「うん。それじゃあ」

こうして二人は告白からそのまま入るのだった。あとはもうなし崩しであった。そしてその翌日。真魚はにこにことした顔で皆に対して言っていた。

「もう大成功よ」

「あら、よかったじゃない」

「じゃあ告白受けてくれたのね、仙一君」

「そうよ。もうばっちりよ」

そのにこにことした顔で教室の自分の席で語っていた。周りの席に同じクラスの女の子が集まりそのうえでその話を聞いていた。

「完全にね。上手くいったわ」

「何か最初聞いた時は何考えてるのよって思ったけれど」

「よかったじゃない」

「恋愛はやっぱり押しよ」

真魚は今度は断言してみせた。

「一に押しで二に押しで」

こう言っていく。

「三と四も押しで五も押しよ」

「普通三と四はないんじゃないの？」

「あんたの場合はあるのね」

「三と四もないよりある方がいいに決まってるじゃない」
これが彼女の主張である。

「だからあるのよ。わかる？」

「そういうもののね」

「まあ納得できるかしら。あんたらしいし」
「そうね」

皆話を聞いて一応は納得するのであった。

「まあとにかくよ。仙一君ゲットよね」

「やったじゃない」

「有り難う。これから二人の楽しい時間がはじまるのよ」
もうそのことを考えで顔が緩みっぱなしであった。

「さて、今日は何しようかしら」

「こりや最後までいったつぱいしね」

「昨日で一氣にだったのね」

「それは言わないけれどね」

あえて、ということである。もう言わなくてもわかることではある。

「まあそれでよ」

「ええ、それで？」

「完全にゲットしたのね」

「本当にやっとな」

今までのことを振り返つての言葉でもある。

「色々あったけれど一氣にやったから」

「相変わらず強引だけれど」

「よかったじゃない」

「よかったけれどそれでも」

しかしここで真魚の顔が曇った。

「どうなのかしら。仙一君って」

「どうなのかしらって?」

「まああれなのよ。最後までいったけれど」

「だからよかったじゃない」

「ハッピーエンドで」

皆は彼女の言葉の意味がわからなかった。何を言っているのかさっぱりである。

「だって。子供できたら責任取るっていうのよ」

「えっ!?!」

「いきなり?」

「ちゃんとゴムは使ったのに」

顔を真っ赤にしたの言葉だった。今の彼女の言葉が何を意味するのかわからない人間はここではないなかった。それも一人でもある。

「それでもっていうのがね」

「まあまあ。それがかえっていいんじゃない」

「できてからおるせとか言われたら最悪でしょ」

「そんなこと絶対に許せないわよ」

真魚は速攻で言い切った。これは女ならば誰でも絶対に許せない言葉である。そう、誰であつてもだ。そうした意味で真魚も常識は備わっていると言えた。

第六章

「それはね」

「じゃあよっぽどましじゃない？」

「ねえ」

ここでまた言い合う女の子達だった。

「仙一君いきなり言ってくれたから」

「全然逆じゃない」

「逆でもよ。ちよつとねえ」

ふう、と溜息も出す真魚だった。

「おつとりし過ぎて天然で」

「それが駄目なのね」

「困ってるの？」

「とりあえずゲットはしたけれど」

そのぼやきは続く。

「けれどこれから。どうなるのかしら」

「そんなの心配しても仕方ないじゃない」

「ねえ」

しかしまた皆はまた真魚に言うのだった。

「それによ」

「それに？」

「今更何言ってるのよ」

「ねえ」

皆の言葉が変わってきた。

「あれだけ強引に押し切ってきたのに」

「今までもこのままいけばいいじゃない」

「このまま？」

「そうよ、このままよ」

戸惑いを見せる真魚に向けての言葉である。

「これからもその勢いでやっていけばいいじゃない」

「女は度胸でしょ？」

またこう告げるのである。

「わかったらよ。今まで通りいきなさい」

「いいわね」

「今まで通りね」

真魚も彼女達の言葉を聞いていつもの調子に戻ってきた。

「それでいいのね」

「そうそう、いつも通り」

「やっていけばいいから」

「それじゃあ」

真魚はやつといつもの調子に戻った。そしてはつきりとした表情になって。

「やってやるわ。これからもね」

「そうそう、突き進みなさい」

「これからもずっとね」

「わかったわ」

遂にその声のはつきりとしたものになった。

「もうね。これでね」

「迷いなんてあんたに似合わないから」

「思う存分突き進んだらいいわ」

「ええ」

完全にいつもの顔になって頷いた。

「じゃあ。これからもやってやるわよ」

「はい、じゃあね」

「頑張つてね」

「例え仙一君が天然でも」

真魚の目は完全に燃え上がっていた。

「やってやるわよ」

告白を成功させても真魚の苦労は終わらない。しかし彼女はもう

決めていた。これからもこの勢いのまま突き進もうと。そのことを強く決意したまた突き進むのであった。

「じゃあ今日はよ」

「何するの？」

「初デートよ」

それをするというのだ。

「それをやってみせるわ」

「じゃあまたいつも通りね」

「やるのね」

「やるわよ。もう何があってもね」

目は燃えているままである。

「私は負けないからね」

「そうよ、その意気よ」

「一直線に突き進めば道が開けるからね」

「ええ」

また皆の言葉に頷く。そうして。

「ゲームセンターまで行ってプリクラも撮って」

「それでやつとはじまるのね」

「あんだ達も」

「順番が普通とかなり違うけれど」

このことも意識して苦笑いにはなる。しかしだった。

「それでもね。やっていくわ」

「そうそう、その調子」

「やっていきなさい、そのままね」

皆もそんな彼女に対して暖かい声をかける。真魚は止まることはなかった。そうしてそのまま一直線に恋愛道を突き進んでいくだけであった。これが彼女の結婚する前の話だ。しかし結婚してからそれは同じであるのだった。仙一もまたおっとりとしたままで。

夜這い

完

2009・5・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8767h/>

夜這い

2010年10月8日15時59分発行